

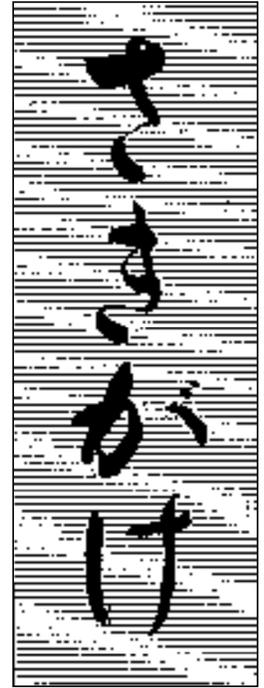
環境問題学習会（3月5日）

オンライン（ZOOM）と会場（あざれあ）の併用

気候危機・感染症・環境破壊を考える —環境問題と労働 運動・社会運動—

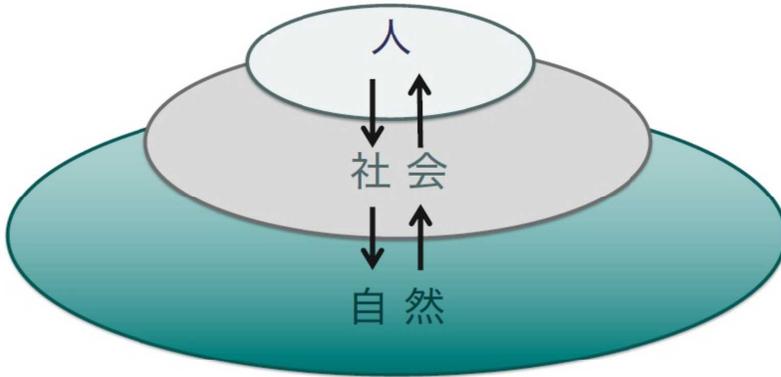


多羅尾 光徳 氏
(東京農工大学 准教授)

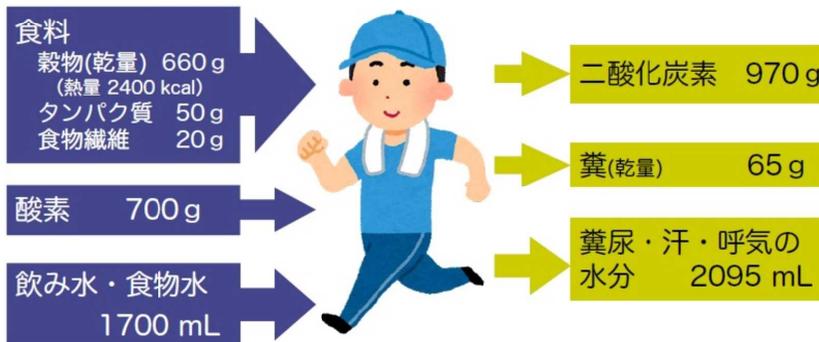


静岡県労働者
学習協会
〒424-0105
静岡市清水区
山切45-18 多田
TEL090-9121-0602

1. 人は社会と自然の2つの環境に支えられている



2. ヒトが生きるために必要な資源と排出する廃棄物

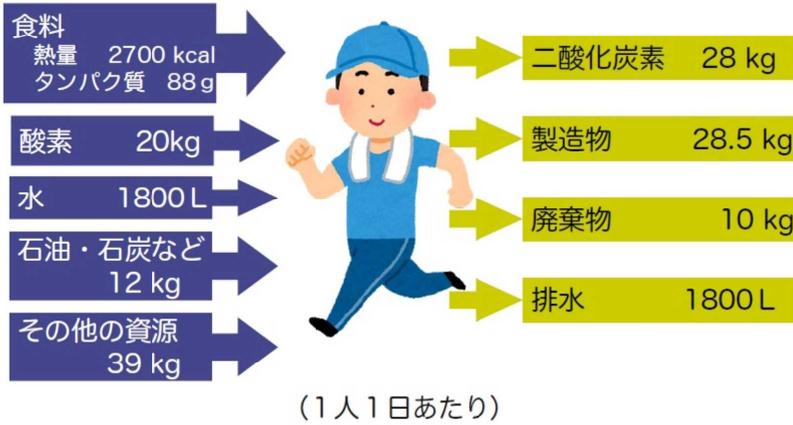


(1人1日あたり)

人は社会と自然の二つの環境に支えられていて、この二つの環境と一体化しており、二つの環境から自由ではありません。

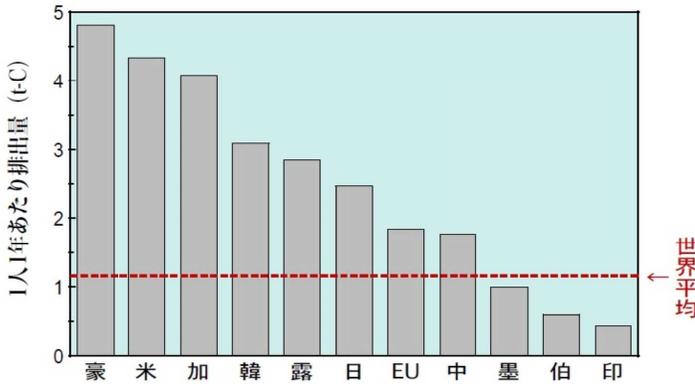
人が生きるために必要な資源と排出する廃棄物は、動物として生きる場合と日本で社会生活する場合とでは大きな差があります。

3. 日本に居住する人が消費する資源と排出する廃棄物



例えば必要な水は1人1日当たり、動物としては0、17リットルですが、社会生活としては1800リットル必要となります。

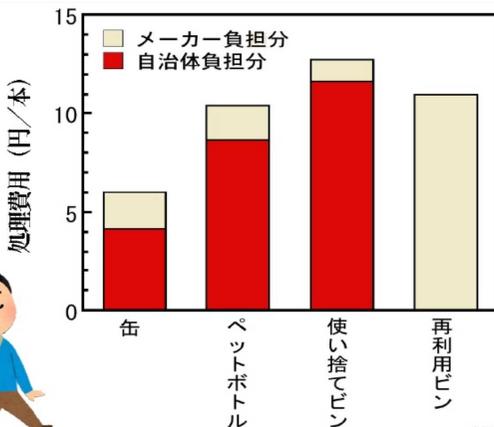
5. 国別1人1年あたりCO2排出量 (2015年)



総務省統計局「世界の統計2019」より作成

環境問題の原因は経済の仕組みの問題であり、とりわけ「先進国」と呼ばれる国々の経済の仕組みの問題です。国別の1人1年あたりCO2排出量では、先進国は世界平均を上回っており、日本は世界平均の約2倍です。

8. 飲料容器の処理費用

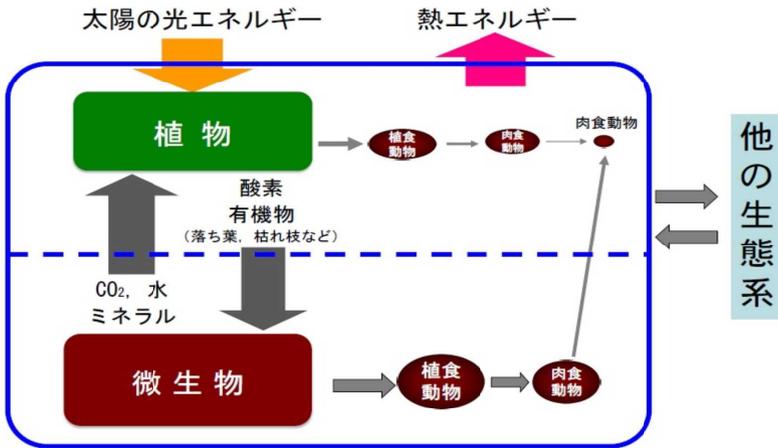


宝酒造の資料より作成

環境問題の解決のためにはライフスタイルを変えなければなりません。本当にライフスタイルを変えるのであれば、社会のあり方を変えることが必要です。例えば飲料容器の処理費用は現在の日本では、自治体がほとんど負担しており、メーカー負担はとて少ないです。こうした仕組みを変える必要があります。

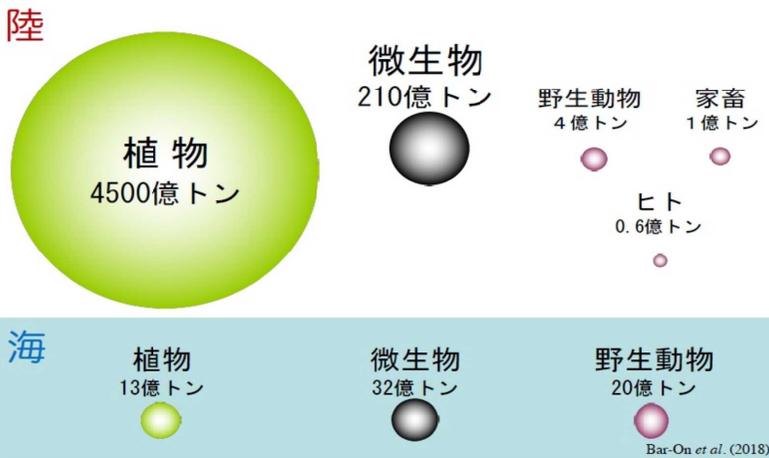


9. 自然生態系の基本的な姿



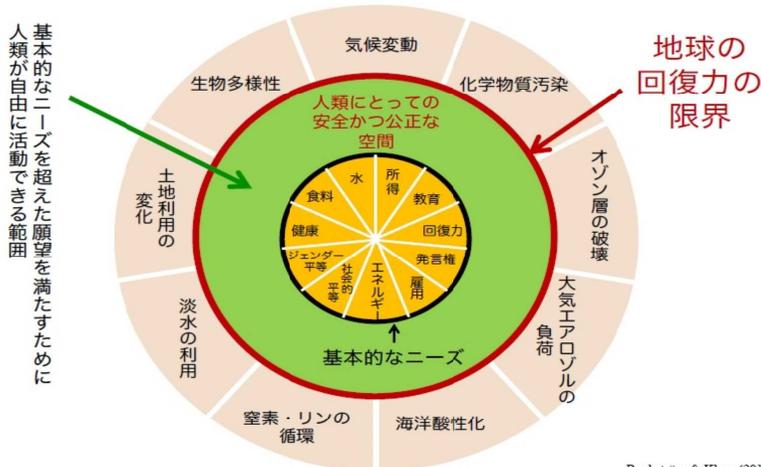
自然生態系の基本的な姿は、植物と微生物の間の循環です。

10. 地球に存在する生物量 (炭素量)



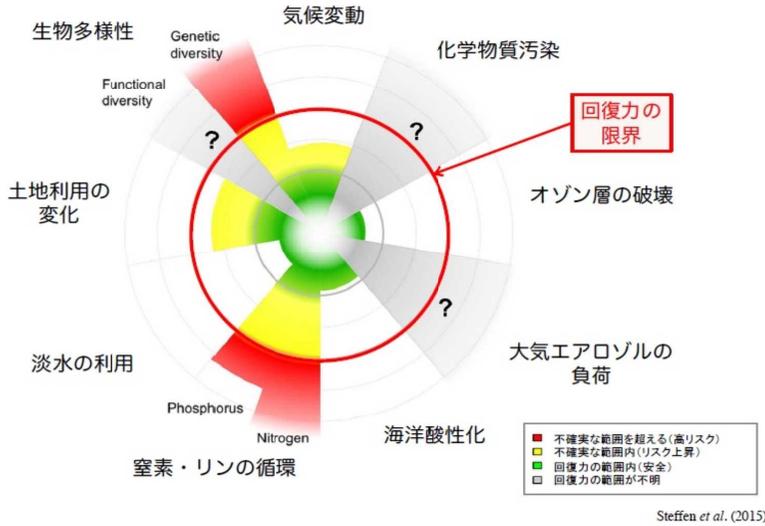
地球に存在する生物量を炭素量で表すと、植物が4500億トン、微生物が210億トンに対し、ヒトはわずか0.6億トンにすぎません。

18. 人の活動と「地球の回復力限界」



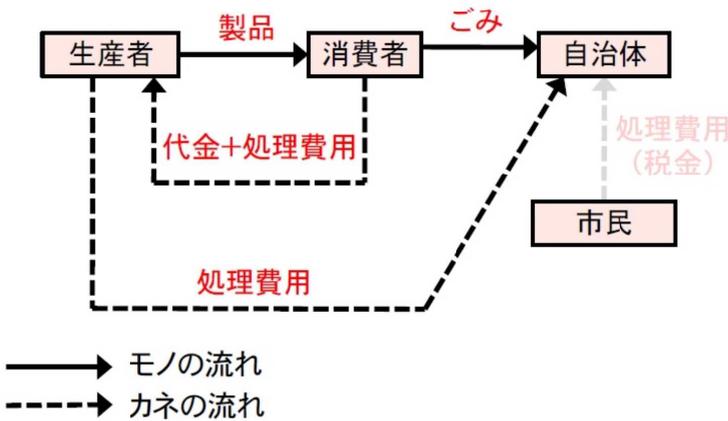
人の活動は地球の回復力の限界内に抑える必要があります。

19. 地球の回復力の現状



すでに生物多様性や窒素・リンの循環は回復力の限界を越えるリスクとなつています。また気候変動や土地利用の変化もリスクが上昇しています。

24. 拡大生産者責任でゴミを処理する場合



求められる経済の仕組みは、広くかつ長期的な視点で利益と費用を評価します。環境を汚染・破壊した人が修復費用を負担することが原則です。

例えばゴミ処理の場合、生産者の製品代金に処理費用を含め、その処理費用を自治体に支払うようにすることです。

労働運動・社会運動として、本来払うべき費用を資本家たちに支払わせること、人々の共有財産（税金・資源）を人々のために使わせることなどを求めることが重要です。

そして労働組合が環境問題に取り組んでいくようにするために、とりあえずSDGsの中にある労働に関わる部分をクローズアップしていくことが多くの人の関心を引き起こすと思われます。

以上